

コンラッドの「無政府主義者」について

秋 葉 敏 夫

この小論は本誌『英米学研究』(No.24) 1989年度掲載の拙論——作家コンラッドと「ガスパール・ルイス」——に続くものである。とりあえず、それを要約してから、議論を始めていこう。

ジョウゼフ・コンラッド(1857~1924)の作品は概して書評家たちには好評でも、一般読者の間ではなかなか人気が出なかった。彼が一般読者の心をつらえるのは、処女作『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*, 1895)出版後18年を経過しており、それまでの彼は作家稼業の厳しさを嫌というほど味わざるを得なかった。いきおい彼は借金を重ねることとなり、ただ読者の興味に迎合する作品を書いたりする。そこでは、たとえば短編小説の場合、その芸術性が、つまり「省略と凝縮による単一効果の達成」が意図されるわけではない。扱われるのは興味本位の物語で、主題の提示も便宜的にならざるを得ず、それは印象的な成果を少しもあげてこない。

単語数19,000弱の中編小説「ガスパール・ルイス」(*'Gaspar Ruiz'*, 1906)も、けっしてその例外ではない。そこに見られる語り手のもっともらしい政治解説は陳腐であり、波瀾に富む筋の展開や、ものごとの偶然性、感傷性はいわゆる三文小説のそれと少しも変わらない。こういう特徴はただ一般読者の興味を引くための安価な手段で、この中編が手っ取り早い金銭かせぎの作品であることを示すものではないか。実現はしなかったが、いわばアクションとお涙頂戴の混合といったこの作品を原作として、映画化の話が持ち上がったのである。

そして、この小説で扱う短編「無政府主義者」(*'An Anarchist'*, 1906)

は、1905年の11月に完成した「ガスパール・ルイス」に続き、同年12月に出来上がっている。これはおよそ8,000語ほどの作品で、その執筆開始は前月の11月と推測される。例によって、この作品も最初は雑誌に発表され、それから他の5編と一緒に、短編集『作品6つ』(A Set of Six, 1908)に収録される。短編という性質からか、執筆から15年ほど経過すると、作家自身はこの作品執筆の動機などはあまり覚えていない。1920年に書かれた「作者の覚え書」では、「私は「密告者」(‘The Informer’, 1906)と「無政府主義者」については、ほとんど何もいうつもりはありません。……洞察力の深い読者は、私がそれらの作品を自分の心の中に見出したと推測するでしょう。しかし、それらの作品、あるいはその要素がどのように心に浮かんできたのか、大部分忘れてしまいました⁽¹⁾」と、コンラッドは述懐するのである。事実、この短編も、さきの「ガスパール・ルイス」と同じように、まだそれほど売れない作家コンラッドの、長編執筆の合い間に書かれた、いわば金銭かせぎのための作品といった色彩がかなり強い。

ここで長編というのは、1904年の夏に完成した約17万語の傑作『ノストローモ』(Nostromo, 1904)と、1906年に入って書き始められた『密偵』(The Secret Agent, 1907)のことである。これらは両方ともいわゆる政治小説で、とくに後者は無政府主義者が何人か登場する政治の不気味な暗黒面を扱っている。その傾向は1908年初めに着手される、次の長編『西欧人の眼に』(Under Western Eyes, 1911)に受け継がれるわけだが、短編「無政府主義者」が『密偵』執筆開始直前の作品であることが注目される。つまり、長編『密偵』の無政府主義者たちと同類の人物を扱い、その簡潔で直截的な表現として、短編「無政府主義者」は書かれていると推測できるからである。ジョン・A・パーマーの次の見解、「短編「無政府主義者」はおそらくコンラッドの政治小説の中で最も弱いものだが、それは政治革命におけるこの真の急進的な言葉を扱った最初の作品であ

る。……主人公ポールは象徴ふうに誇張された典型的な例であり、それでも十分に「現実性を備えて」いて、読者の感受性を引き付け、この人物は結局自分自身の政治行動に含まれる圧力のばかげた延長にすぎない、といった認識を読者に強いることができる²⁾というの、作品の核心をたくみに突いている。芸術性から判断すれば欠点も窺われるものの、この短編「無政府主義者」は、長編『密偵』や『西欧人の眼に』における1つのエピソードとしても、違和感なく役立つ側面を持っている。

短編小説の真髄は「省略と凝縮による強調」である。つまり、非常に意識的な言語構築物として、それは余分なものはぎとり、ものごとを凝縮して単一効果を狙う。短編「無政府主義者」でも、その基本は普通に守られ、主人公の背景で不必要なことはいっさい説明されていない。たとえば彼の家庭環境や親戚関係、あるいは青年時代までの経験は、読者にとって少しもわからない。およそ全体の3分の1を占める導入部では、主人公となる人物が紹介され、彼がなぜ無政府主義者と呼ばれるのか、その経緯が説明されるのである。そして彼の告白する体験が物語の中心であり、作品の主題として、「機関士ポールの見解に見出される主な真実は、些細なことが人間の破滅をもたらす場合があるというものだった³⁾」と物語の語り手はまとめている。そのことを作家コンラッドの関心に当てはめれば、主人公ポールを1人の例として、無政府主義者といわれる者の実態やその愚行が問題点の中心だと考えられる。しかも、それらの問題が代々繰り返されることの暗示を加えることで、作家の態度がより明確になってくる。

ここで、物語を簡単にまとめていこう。南アメリカの巨大な河口に、島全体が牧場になっている所がある。それは栄養食品「牛肉エキス」の生産のためだが、そこはまた珍しい蝶の生息地である。語り手の「私」は蝶の採集家で、たまたまその島を訪れたとき、牧場の支配人から「無政府主義者」とあだ名される機械工ポールのことを聞く。支配人の話

よると、近くの海上にスクーター船が見えていたが、脱獄囚の風体で島をうろつき回るポールは、偶然出会った支配人に拾われたのである。そして彼は、その牧場を経営する会社所有の小さな蒸気船の機関士として働いていて、よその条件のよい職場へ逃げ出さないように「無政府主義者」とあだ名をつけられており、彼自身もそれをあえて否定しないでいるらしい。

この導入部の分量は、およそ8,000語の作品の3分の1を越えている。普通の短編小説としては、これはいささか冗長な書き出しだろう。ただしそれでも、この得体が知れない機関士ポールに読者の興味を引き付け、一般に血なまぐさが漂い、人々を遠ざける冷酷非情な無政府主義者のすがたが言及されて、この導入部もそれなりの役割を果たしている。そして物語がこれからどのように進むのかは、この段階では、まださっぱりわからない。

語り手の「私」はやがて機械工ポールと親しくなり、ある晩、彼のそれまでの体験を聞くことになる。作品の展開部とクライマックス部は、彼の話すその身の上話である。ここでは、語り手の「私」は聞き役にまわっていて、途中、その話を要約したりポールの話している状況を報告することはあっても、話が終わるまで自分の意見をさしはさむことはほとんどない。

機械工ポールは兵役を終えてパリの仕事に戻り、将来は独立した仕事を持ち、結婚を考えていた。25才の誕生祝いに同僚から夕食をおごられ、彼は酒を飲む。隣の席の見知らぬ2人も仲間に入れて、酒杯を重ね、彼はまったく幸福な気分浸っていた。ところが、その2人の言葉を聞いて、ものごとが変わる。「料理屋の外の全世界が、ただわずかな個人が馬車に乗り大邸宅で豪華な生活をするために、多数の惨めな人間があくせく奴隷のように働かなければならない、陰うつで邪悪な場所のように彼には思われた⁽⁴⁾」のである。見知らぬ2人におだてられ、彼は酔っ

た勢いでビンやグラスを蹴飛ばし、「無政府主義ばんざい！ 資本家に死を！」と何度もわめいてしまう。警官が入ってきて、彼は捕らえられ、弁護士も空しく、結局監獄へ送られる。

刑期を終えて刑務所を出た彼に、仕事を与えてくれる者はいない。途方に暮れていると、公判に出席していたという中年の男から話しかけられ、機械工ポールは考え方が健全だとほめられて、その男の仲間、無政府主義者の仲間になされてしまう。警察と仲間に見張られ、彼はもう逃げ出して、昔の自分の生活を送ることはできない。まもなく銀行強盗が計画され、ポールは初心者として、裏通りの見張りや爆弾の入ったカバンの注意をまかされる。だがその結果は、誰かが密告したらしく、彼は警察に逮捕されて、南アメリカのフランス領へ送られる。それには、路上で話しかけてきた中年の男サイモンと、以前料理屋で知り合いになった2人のうちの1人、マフィルが一緒だった。

機械工ポールの身の上話は、さらに事件が続いていく。それは普段の抑えた克己心の原因をそれとなく暗示させる事件である。

その刑務所には、約80人が90人の囚人が刑に服している。そしてそこで逃亡のための謀反が計画され、それが実行に移される。まず6人の看守のうち、2人は夕方宿舎を見回るときに襲撃され、窒息死させられる。ポールはその行動には参加しなかったという。やがて残りの4人も襲われ、その結果がどうなったかは定かではない。看守長の妻の勇敢な合図で、近くの島から兵士たちが到着する。それから、遅れてやって来た兵士たちのものに違いないボートを、ポールは偶然発見する。彼はそれに乗り込み、激しいスコールを避けるため、ボートを島の反対側の岸へ寄せて、近くのあばら屋に隠れる。このあたりの描写は短文のことが多く、作家コンラッドは動きの激しい出来事の描写を、きびきびと効果的に進めていく。

物語はいよいよ全体の5分の1強、およそ1,500語ほどのクライマッ

クス部に入る。ここでも展開部の後半と同じく、目まぐるしい動きと深い緊迫感があり、それらは読者の興味をけっして逸らさない。

まもなくサイモンとマフィルがそこに姿を現わし、近くのボートを発見する。ポールは2人に呼びかけるが、そのボートは彼らのものだと説得される仕末である。彼は謙虚にボートに乗せていってくれるよう頼まざるを得ない。しかし彼は、逃げる途中たまたま拾った看守のピストルを持っており、いつでも2人を殺せる手筈を整えている。3人はボートに乗って交代で漕ぎ、通りかかる船を信じて広々とした海に出る。やがてポールはピストルを取り出し、他の2人を必死に漕がせるのである。そして2日目、彼らがへとへと疲れ切ったとき、ポールは水平線上に船の帆を見る。彼らは生き返ったように船を漕ぎ、そこまで強制させたポールに感謝を述べるが、彼の気持ちはずっと深いものだった。機械工ポール自身にも落度が無いとはいえないものの、人生を台なしにされた1人の庶民の怒りが、ここで次のように爆発する。

「……私は彼ら2人を見ました。彼らのうそ、彼らの約束、彼らの脅し、そして自分の惨めなすべての日々を、私は思い出しました。私が刑務所から出たあと、彼らはなぜ私を1人にしておくことができなかったのでしょうか？ 私は彼らを見て、彼らが生きているあいだ、私はけっして自由になれないと思いました。けっして。私だけでなく、私と同じように心の優しい頭の弱い他の人々もけっして。それというのも、あなた、私は頭が強いことを知っているからです。激しい怒りが私を襲いました。——完全に酔ったときの怒りです——でも、社会の不正に対してではありません。ああ、絶対に！

『自由にならなければいけない！』私は激怒して叫びました⁶⁾。

それからポールは、持っているピストルで2人を射殺し、そのなきが

らを海に放り込む。やがて大きな船に引き揚げられる彼は、言葉のわからない人々に囲まれて、なにか居心地がよくない。結局、ボートと引き換えに、彼は例の支配人と出くわした島へ下ろしてもらったのである。

機械工ポールの語る身の上話は、これで終る。物語の終結部は語り手の「私」とポールとの別れを扱う部分で、ほんの300語ほどと短い。調査の結果、囚人の反乱に関しては細部にいたるまで、ポールの話した通りだったという。しばらくして語り手の「私」がこの「無政府主義者」に会うと、彼は以前よりやつれ、一層弱々しそうになっていた。「私」は彼に対して一緒にヨーロッパへ戻るよう誘うが、その試みは拒絶される。「『私はここで死にます』彼はいった。それから沈んだ口調で付け加えた、『奴らから離れて』⁷⁾」ここで「奴ら」というのが誰を指すのか少し曖昧だが、それは彼が殺したマフィルやサイモンのように、心の優しい頭の弱い平凡な市民を引きずり込む、ヨーロッパの無政府主義者たちのことだと理解すべきだろう。

ところで、短編「無政府主義者」の物語は、機械工ポールのこの身の上話を中心である。そして題名が「無政府主義者」となっているが、ここには、いわゆる本格的な無政府主義者は登場しない。機械工ポールに関わる人物たちも真面目な政治談義をするわけではなく、たとえば無政府主義の政治理論などはこの短編の扱うところではない。題名の「無政府主義者」は、具体的にはポールのことを指している。ただし彼は無政府主義に興味を持っているわけではないし、それどころか、政治活動とは無関係の、仕事熱心な普通の青年にすぎなかった。無政府主義者と出会って運が悪かったといえればそれまでだが、彼は自分の酒癖を知らなかったものの、いわば利用された被害者と充分に考えられるし、それも彼自身の言葉を借りれば、彼が「優しい心と弱い頭」の持主だったからである。ところが、語り手の「私」は、機械工ポールこそずっと無政府主義者らしいと皮肉なとらえ方をして、作家コンラッドの見解に違いな

いものを、次のように述べる。

概括すると、彼は私に告白したり自分で思っていたよりも、ずっと無政府主義者らしいところがあったと私は考える。そして彼の場合の著しい特徴は別として、彼は他の多くの無政府主義者たちととてもよく似ていた。優しい心と弱い頭——それこそこの謎を解く言葉である。そして事実、この世の最も厳しい矛盾と最も恐ろしい闘いが、感情と情熱を抱くことのできるすべての個人の胸の中で続けられていくのである⁽⁸⁾。

機械工ポールの性格は単純である。出来事に遭遇しても、彼が深く考え、自ら進んで別の行動に移るといことがない。いかにも短編小説らしく、ものごとは不自然でない程度に単純化され、ポールはただ引きずり込まれ、振り回される被害者の役を務める。彼はそこではいわば「何かに利用されるもの」にすぎず、政治世界におけるこの1つの特徴が意識的にドラマ化される。料理屋では彼は無政府主義の宣伝に一役買い、刑務所出所後は銀行襲撃の見張り役を背負わされた。そして人間が「何かに利用されるもの」といった側面は、ただ政治世界だけでなく、普通の社会生活の中でも見られ、そこで個人のエゴイズムがたくみに描き出される。短編「無政府主義者」のすぐれているところは、その自己利益に邁進する、個人のエゴイズムを書き込んでいることだろう。ポールが料理屋事件で逮捕されたときの裁判では、社会主義者の弁護士が自発的に彼の弁護を引き受けた。しかしこの弁護士は、ポールが無政府主義者でないと主張しても聞き入れず、彼を社会の犠牲者として、すばらしい弁論を披露する。それというのも、「この若い弁護士は自分なりのやり方を持っていて、この件はまさに彼が最初の仕事として望むうってつけのものだった⁽⁹⁾」からである。それにまた、機械工ポールを雇い、否定

されないのをよいことに、彼に「無政府主義者」とあだ名をつけた、牧場の支配人もその例外ではない。ポールが現われるまでは、支配人は何人もの人間に、条件がよいことから製材所へ逃げられてしまっていたのである。「無政府主義者」という言葉にはどこかうさん臭さが漂い、「その男の脚を蒸汽船の甲板に鎖で縛り付けておくよりも、その名前による方が、うまくその男を引き留めておける⁹⁰」と、支配人は満足げに説明する。とうぜん、例の弁護士もこの支配人も、ただ立場の弱い者に付け込むだけで、相手の本当の救いを考える気持ちなどは少しもない。

そして議論を機械工ポールにもう1度戻すと、彼は曖昧なかたちながら、採集される蝶と同一視できるのではないか。あるいは同一視されるのを、作家コンラッドは読者に望んでいるのではないか。語り手の「私」は蝶の採集家で、「私」の出会いの牧場支配人の島は、ごく珍しい華麗な蝶の生息地である。短編としてはかなり冗長な導入部で、「私」は支配人から「すごく熱心な蝶の殺し屋⁹¹」と笑われ、「今日の殺しの仕事はどうでしたか？ 蝶はたくさんいましたか？ はっ、はっ、はっ!⁹²」と尋ねられる。導入部の前半でこういう描写に接しても別にどうとも思われないが、機械工ポールの身の上話を聞いたあとでは、この蝶への言及がいわば1つの伏線のように思われてくる。一方は「珍しくて華麗な」ために、他方は「心が優しく頭が弱い」ために、それぞれ強い者に引っ掛けられ、捕らえられてしまうのである。蝶と男性との同一視はイメージの連想上のささか無理に感じられるが、両者ともにその被害の受け方がなんとも似ていることは否定できない。

短編「無政府主義者」は、いわゆる内容が凝縮され、主題の展開もすぐれた技法で進められる、芸術性の高い作品ではない。そこでは、たとえば大きな欠点として、物語の展開があまりにも一方的であり、作家の意図がはっきり透けてしまっているのである。小説技法の上でも、語り手の自然で見事な使用を除くと、特筆できるものは少なく、短編特有の

主題の拡大や強烈さの効果に欠けている。この作品は、長編の合い間に書かれており、とくに次の長編『密偵』で描かれる政治世界の一端を扱うという点で、その準備的な試みの作品と理解すればよいだろうか。たとえばレオ・グルコーの比喩的な次の言葉、「この物語は、1つの鉄壁の地下組織に捕らえられる人間という主題に、充分なオーケストラの扱いが与えられる長編『密偵』のための短いリハーサルとして、コンラッドの役に立っている¹³」というのも同じことを述べたものである。そして作家コンラッド自身、それ以上のことは、この短編では望んでいなかったと推測される。

NOTES

テキストは Joseph Conrad: *A Set of Six* (London: J.M.Dent and Sons, 1954) を使用した。後注における頁数はそれによる。

- (1) Joseph Conrad: *A Set of Six*, 'Author's Note' pp.vii-viii.
- (2) John A. Palmer: *Joseph Conrad's Fiction, A Study in Literary Growth* (New York: Cornell University Press, 1968) p.121.
- (3) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p.144.
- (4) *Ibid.*, p.146.
- (5) *Ibid.*, p.147.
- (6) *Ibid.*, pp.158-159.
- (7) *Ibid.*, p.161.
- (8) *Ibid.*, pp.160-161.
- (9) *Ibid.*, pp.147-148.
- (10) *Ibid.*, p.143.
- (11) *Ibid.*, p.137.
- (12) *Ibid.*, pp.137-138.
- (13) Leo Gurko: *Joseph Conrad: Giant in Exile* (1962; rpt. New York: Macmillan, 1979) p.164.